



2019 年 (令和元年)
9月号 (No. 892)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

2025年、5年後の創立120周年に 向け記念事業委員会が活動スタート

来る2025年、本会は創立120周年を迎える。永年にわたって登山文化の興隆と継承に努めてきたが、社会環境の変化とともに登山の形も大きく変わりつつある。5年後、さらにはその先を見据え、様々な記念事業を通じてJACの将来像を模索していく必要がある。事業の現状について重廣委員長に報告してもらった。

120周年記念事業委員会委員長 重廣恒夫

記念事業委員会の発足

2017(平成29)年6月の総会において私は副会長に選任され、新たに設けられた記念事業委員会と支部事業委員会を担当してきた。記念事業委員会については2025(令和7)年に迎える日本山岳会創立120周年を視野に入れたもので、新たに委員会メンバーを選

任するのに時間が掛かることから、長きにわたって活動を続けている委員会委員長を委員とした。いずれもが、それぞれの事業を通じて日本山岳会の伝統を受け継ぎ、現状認識と将来を考える意識が高いと感じたからである。

5ヶ月の準備期間を経て、12月から月1回のペースで委員会を開催した。最初の委員会では198

目次

2025年、5年後の創立120周年に向け 記念事業委員会が活動スタート	1
第4回「山の日」記念全国大会を山梨県甲府市で開催	4
「やまなし山の日」から国民の祝日 「山の日記念全国大会」へ	5
第4回くまもと「山の日」登山祭を 阿蘇・杵島岳で開催	7
天山山脈・ウチーティリ峰登山報告	8
追悼 平井吉夫君のこと/馬場勝嘉さんを偲ぶ	10
東西南北	12
活動報告 山行委員会	13
新入会員	13
支部だより	15
越後支部/東九州支部	
図書紹介	17
図書受入報告	17
会務報告	18
ルーム日誌	18
会員異動	19
INFORMATION	19
編集後記	19

▶日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時



交流登山隊が挑むエクアドルの最高峰、チンボラソ

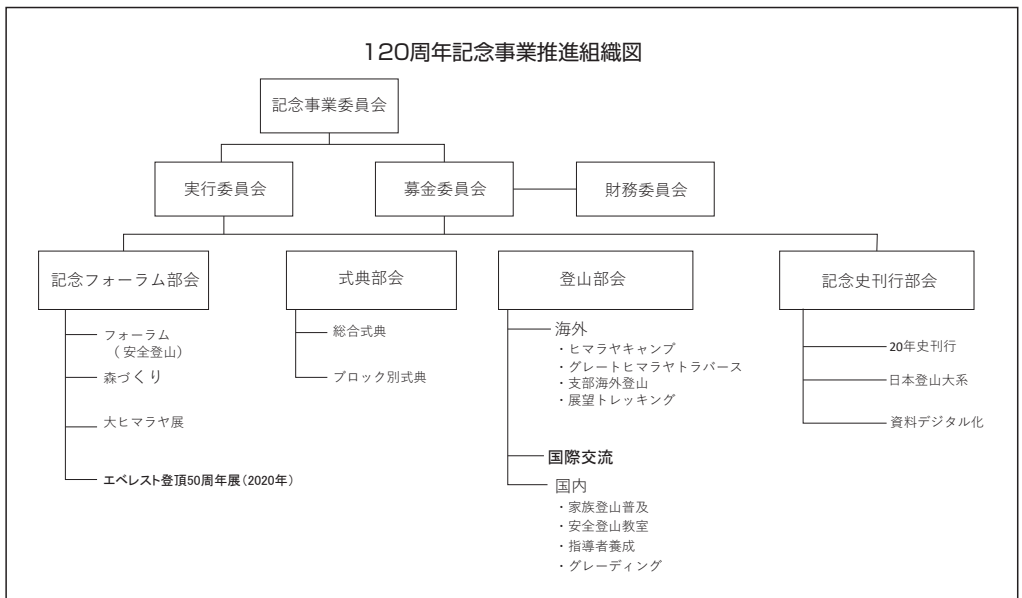
5(昭和60)年の80周年、1995(平成7)年の90周年、2005(平成17)年の100周年、2015(平成27)年の110周年に実施された事業の資料を提出し、周年事業の再認識を行なった。特に100周年記念事業の体制作りと実施に

早くも記念事業開始

委員会を進めていくなかで、本会にいくつかの提案が持ち込まれた。「日本・エクアドル外交関係樹立100周年交流」(渡邊雄二・栃

ついては、『日本山岳会百年史』や会報「山」などに詳述されており、規模は異なるにしても「日本山岳会の登山文化の継承」を念頭に事業展開をしたいと考えている。併せて委員会と支部に対して記念事業委員会と支部として試案した海外登山、グレート・ヒマラヤ・トラバース、国際交流、年史の刊行、日本登山大系、山のグレイディング、医療シンポジウム、記念式典などについてアンケート調査を行い、各々の必要性や関心度を計り、貴重なご意見をいただいた。

120周年記念事業推進組織図



本支部長、「山の天気ライブ事業」
(猪熊隆之会員「気象予報士」)
「ヒマラヤ・キャンプ」(花谷泰広
会員「甲斐駒ヶ岳七丈小屋運営」

プロジェクトの概要 ◆日本・エクアドル外交関係樹立 100周年交流PJ

登山ガイド)、「日本山岳会のヒマラヤ登山映像ライブラリーの整備」(鹿野勝彦会員「1988年、カンチエンジュンガ縦走登山隊隊長」などである。

提案者と打ち合わせを重ね、いずれも120周年記念までの継続事業(日本山岳会・エクアドル交流登山を除く)とし、それまで進めていた「グレート・ヒマラヤ・トラバース」(重廣)、「エベレスト登頂50周年記念フォーラム」(神長)と同じように、プロジェクトとして始動することにした。

2018(平成30)年に日本とエクアドルは外交関係樹立100周年を迎えた。1年遅れとなったが、在エクアドル日本大使館の労もあって、日本山岳会とエクアドル山岳会との国際交流事業として実施することになった。19(令和元年)9月に日本山岳会がエクアドルを訪問し、エクアドル山岳会とエクアドルの最高峰、チンボラソ(6310m)登山やトレッキングを行ない、交流を深める。20年(令和2)年9月にはエクアドル山岳会が訪日し、富士山などで交流登山を行なう予定だ。

本年は9月1日～14日にかけて日本から14名の隊員が参加するが、8月17日～19日には富士山で高所順応訓練を行なった。なお、この交流登山では富士山トレッキングに続いて、「登山時の血中酸素濃度・心拍数・乳酸値・血糖値・ケトン体値の動態把握」が中谷康司隊員(中央大学保健体育研究所システム生理学研究班主査)によって行なわれる予定である。

◆ヒマラヤ・キャンプPJ

先輩登山者から継承していた登山文化を、次の世代につなぐリレーが途切れて久しい。ヒマラヤ・

キャンプはそのような現状に危機感を抱いて、花谷会員の個人プロジェクトとして2015年から始まった若手登山家養成プロジェクトで、これまでに4度実施された。来年から開始する日本山岳会でのプロジェクトの目的は、

①海外登山を目指す若手登山者(20歳台から30歳台)の受け皿となる。

②年間を通じて座学やトレッキング山行を実施することで、継続的な登山者教育を行なう。

③120周年(2025年)に向けて若手人材を育成し、さらにその先を見据える。

とし、2020年はペリ・ヒマール山群の未踏峰Amotang Himal(6393m)の初登頂を目指し、9月から本格的に始動する。120周年に向けて地道に活動を継続し、将来の日本山岳会だけでなく、日本の登山界を背負うような人材を育成していきたいというのが、花谷会員のヒマラヤ・キャンプに懸ける大きな夢である。

◆グレート・ヒマラヤ・トラバースPJ

グレート・ヒマラヤ・トラバース(GHT)はこれまでのヒマラヤ

登山の足跡をたどりながら、新しいヒマラヤ登山を模索する「温故知新」の旅である。

【目的】

- ①ヒマラヤ地域の変遷調査（初登頂時代との比較と環境変化）。
- ②探検的ヒマラヤ登山による未踏峰・未踏ルート登頂（ヒマラヤ登山塾の実施）。
- ③夢を描き・計画を作り・実行するチャレンジ精神を、カンチェンジュンガからK2までの5000kmにも及ぶ長大なヒマラヤ山脈横断という踏査を通じて次代に継承する。

【実施概要】

第Ⅰ期（2020年春～2022年秋）カンチェンジュンガ～マカルー・エベレスト～マナスル～アンナプルナ～ダウラギリの近隣を通過するグレート・ヒマラヤ・トレイル（ネパール最東端～最西端）のハイ・ルートの完全踏査および未踏峰・未踏ルートからの登頂。

第Ⅱ期（2023年春～2024年秋）インド国内通過。

第Ⅲ期（2025年春～秋）パキスタン国内通過。

◆山の天気ライブ事業PJ

安全登山啓発活動の一環として、猪熊会員の山の天気、観天望氣講座の「出前授業」を支部単位で行なう。併せて指導者養成、登山教室運営、ファーストエイド、セルフレスキューなどの実施を支部事業委員会が主管して行なう。すでに20（令和2）年2月29日（土）～3月1日（日）、神奈川支部での開催が決まっている。

- ①机上講座 (1)気象遭難の実態(2)気象遭難を防ぐための天気図の見方 (3)その山域の気象特性
- ②屋外（山小屋などの近く）での観天望氣講座 (1)雲の種類について (2)講座の際に見られる雲についての説明 (3)風の読み方

この事業は支部開催の講座として活用、1日目に机上講座を90分程度行ない、2日目に雲や風、天気についての解説をしながら、支部会員と歩く。山頂でも見られる雲や風についての解説を行なうが、これはその場にいる一般登山者も参加できるようにする。

◆日本山岳会ヒマラヤ映像デジタル化PJ

日本山岳会が所蔵する文物については、2018（平成30）年4月2日の第3回委員会において、当

時のデジタルメディア委員会の多田真弘委員長から、「JAC発行の機関誌、報告書等のデジタル公開」として提案されている。本会が所蔵するヒマラヤ遠征隊の映像はフィルムやビデオテープで保管されているが、著作権の存在するものも多く、一本一本確認が必要である。120周年に本会の所蔵する文物のデジタル化・公開が目標ではあるが、今回、その先行事業として、ヒマラヤ映像のデジタル化を、資料映像委員会内にプロジェクト・チームを立ち上げて進めていきたいと考えている。

◆エベレスト登頂50周年記念フォーラムPJ



ヒマラヤ・キャンプが初登頂を狙うAmotang Himal (左)



GHTの第Ⅰ期はカンチェンジュンガ山群からスタート

1970（昭和45）年、日本山岳会がエベレストに登頂してから来年で50年になる。昨今、エベレスト登山は商業化され、数えきれないほどの登頂者を生んでいる。半世紀にわたるエベレスト登山の変遷を総括するフォーラムを、来年春に豊岡市で開催予定である。

*

これらのプロジェクトに加えて、全国の支部および会員が参加できる事業として、「日本列島古道調査（仮）」も模索されている。いずれにしても、記念事業の軸足は、日本山岳会の喫緊の課題である「会員増強」「支部の活性化」「安全登山の強化」であると考えている。

REPORT ①

第4回「山の日」記念全国大会を
山梨県甲府市で開催

約900人の参加者が集う

今年で4回目となった国民の祝日「山の日」の記念全国大会が8月11日、山梨県甲府市の総合市民会館・山の都アリーナで開かれ、記念式典とトークショーにおよそ900人が参加した。

山梨県トロンボーン倶楽部のウエルカム演奏と山梨県と甲府市の紹介映像が映し出されるなか式典は午前9時から始まり、まず「こどもの森みどりの少年少女隊」の8



多くの来場者で埋まった会場

人が山への親しみや山の恩恵に感謝する想いを込めて8つの《山鐘》を打ち鳴らした。《山鐘》は上高地での第1回大会以来、恒例となった祈りと願いの鐘である。

開会宣言は山梨・甲府大会の実行委員会顧問で、超党派「山の日」議員連盟会長の衛藤征士郎さん。開会宣言で「山や森に感謝し、山に活かされている想いを大切にしたい。我が国が平和であればこそ、世界に誇る山の日だ」と国民の祝日の意義を訴えた。

全員で国歌を斉唱したあと、式典では山梨県の長崎幸太郎知事（実行委員会会長）が「山梨は世界に誇る山々を擁している。私たちには豊かな自然を守り、将来に引き継いでいく責務がある」と述べたのについて、樋口雄一・甲府市長や来賓として出席した原田義昭・環境大臣、本郷浩二・林野庁長官、大柴邦彦・山梨県議会議長が挨拶、続いて山梨県選出の衆参9人の国会議員も壇上に並んで紹介された。

楽しいアトラクション

「富士山火焔太鼓」と呼ばれる和太鼓が広いアリーナに響き、山梨の山々の映像が、長年「山の日」活動と取り組んできた歩みとともに紹介された。甲府市がアメリカや韓国、中国と結んできた姉妹都市からの祝いのメッセージが披露され、「みどりの少年少女隊」が公募・山の日之歌ポップス部門で最優秀賞に選ばれた「山はふるさと」（吉井省一作詞、都倉俊一作曲）を合唱した。

年間を通じてイベントを展開

富士山を静岡県と分かち合い、北岳、甲斐駒ヶ岳、八ヶ岳、金峰山、雲取山などを擁する山梨県は78%を山と森林が占め、水にも恵まれている。平成9年の「山の日」宣言から数えて21年に及ぶ「山の日」の取り組みでは、3つのコンセプトによって活動を積み重ねてきた。《山に親しむ》《山に学ぶ》《山と生きる》である。

活動の詳細は当会山梨支部事務局長・古屋寿隆さんの別稿に詳しいが、今回の全国大会はサブテーマに《持続可能な未来へ》を掲げ、山との共生を将来の発展的な



式典は8つの《山鐘》を鳴らしてスタート

地域づくりにつなげたい、とのメッセージを発信している。

そして、式典の出席者に配られた「令和元年度（2019年度）イベントガイド」で、8月11日の「山の日」を中心に山梨県内で実施される関連行事を8ページにわたって紹介している。

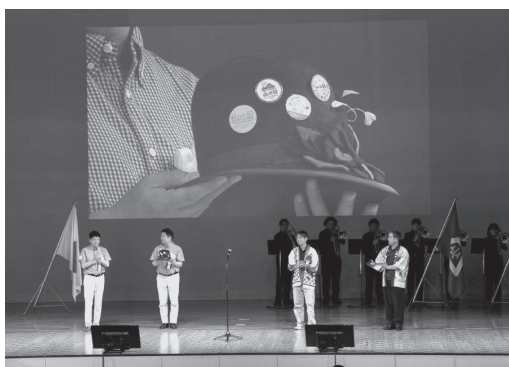
注目したいのは、山梨の山の魅力を味わってもらうための様々な企画を、年間を通じてイベント展開している点である。

6月が22イベント、7月30、8月28、9月以降2020年の3月まで、52のイベントがびっしりとページを埋めている。記念登山、トレッキング、自然観察会、地元大

学主催のシンポジウムなど。シンポジウムを除くと10人から30人規模が多い。

「山の日」記念全国大会実行委員会や県の担当が、これだけのイベント開催を掌握しているだけでも力の入れようが分かる。実行委員会と山梨県森林環境部の担当各位に敬意を表し、引き続きトップ・ランナーとして「山の日」の啓発活動に努めてほしいとお願いしたい。

来年、全国大会が開かれるのは大分県である。大会を締めくくるとリレー・セレモニーでは山梨県の長崎知事らから大分県の安東隆副知事、九重町の日野康志町長に大



来年開催の大分県に「山の日帽」を引き継ぐ

会シンボルの「山の日帽」が引き継がれ、山鍾を11回(来年の大会の成功や、明るく豊かな山の未来を子どもたちに託す想いなどをプラスした)鳴らして閉会した。

「山梨自慢」のトークショー

短い休憩を挟んで11時過ぎからトークショーが始まった。出演者は山岳ライターの小林千穂さん、女優の釈由美子さん、紀行作家のシェルパ斎藤さん。山梨県に移り住むなどした山梨大好きな3人だ。地元YBS・山梨放送の桜井和明アナウンサーの軽妙な司会で山梨の魅力、山々の特徴、身近にある山の恩恵を「住んで良し、遊びに



山梨大好きで盛り上がったトークショー

来て良し」と語った。皆さん語り口が爽やかで、楽しく、実感がこもったトークショーだった。

REPORT ②

「やまなし山の日」から国民の祝日 「山の日記念全国大会」へ

3つのコンセプトを掲げ

今から20年余り前の1997年2月、山梨県では、県内の著名な山の中から「山梨百名山」を選定して公表した。その後、全国に先駆け8月8日を「やまなし『山の日』」と定め、3つのコンセプトを掲げた。

「山に親しむ」「山に学ぶ」「山と生きる」の3点である。その内容は

- ①「山は楽しい、山は美しい」と認識し、山や森林と触れ合うこと、
- ②「山に生かされている、山が人を育てる」ことを意識し、森林の機能や山村の歴史・文化、貴重な自然環境・生態系などについて学び、考えること、
- ③「山から愛される生き方」を指針に、自然との共生、森づくり、山村地域の活性化などを目指す、というものである。

山梨県は県土の約8割を美しい山岳や豊かな森林が占め、それら

(報告Ⅱ「山の日」事業委員会・萩原浩司、清登緑郎、成川隆顕)

を源に清らかで深い溪谷が至る所に存在する。県内には国立公園が3つ、国定公園が1つ、県立公園が2つある。さらに2013年には富士山が世界文化遺産に、2014年には南アルプスがユネスコのエコパークに、本年6月には奥秩父「甲武信」もユネスコ・エコパークに登録されている。

「やまなし『山の日』」の目的は、これらの自然に能動的に働き掛け、かつ恩恵を受けるとともに、未来永劫に、このかけがえのない豊かな自然を、サステイナブルに次世代に引き継いでいくことである。

豊かな自然を次世代に

そのため山梨県では、「やまなし『山の日』」を記念し、この目的を達成するために様々な事業を実施してきた。メイン・イベントは、当支部も加盟する山梨県山岳連盟の



好評につき10回も続いている「山の博覧会」

「山梨百名山」チャレンジ登山と森林組合の「緑の教室」。山梨支部では、日本山岳会の創立百周年を記念して2005年から「山の博覧会」山を知ろう、山に行こう」を主催し、イベント展開に加わった。講演会を主体とした「山の博覧会」は会場提供者の山梨学院の絶大な支援のお陰もあり、好評のうちに10回を数えた。さらに「山を知ろう、山に行こう」のサブタイトルも影響してか、参加者から実践的な登山講座を開催してほしいという要望が多く挙がった。

地元大学に登山の基礎講座

そこで、国会で祝日「山の日」法

案が成立した翌年の2015年から、山梨学院大学の講座の一環として、2単位14回連続の「山の日制定記念事業・やまなし登山基礎講座」を設けることになった。

内容は登山振興のための基礎知識・技術、ファーストエイド、実践登山はもとより、当会の基盤でもある山岳文学・芸術、登山史など山岳文化に関する講座も組み入れている。さらに、このところ山岳遭難が多発しているのを受けて、山梨県警察山岳遭難救助隊の力も借り、遭難防止講座を追加して総合的な山岳講座として本年5回目を迎えることとなった。

『甲斐百名山』を今秋発行へ

また、山梨支部では今年、創立70周年を記念して新たな事業を始めた。

すでに制定された「山梨百名山」の選から漏れてしまったが、捨てがたい魅力的な山はほかにいくつも存在する。里山から高山まで身近な山々が私たちの周りにはある。

これらの山々を全国の山岳愛好者に知ってほしい、山梨を訪れて堪能してほしい、地域の活性化に少しでも貢献したい、という支部

会員の強い想いから、今秋には『甲斐百名山』として、冊子を発行する予定である。これらも参考に、山梨の山岳や森林、溪谷などの自然や山あいの温泉などを満喫し、祝日制定の趣旨である《山に親しむ機会を得て、山の恩恵に感謝する》ことを、親子登山を含めより多くの人たちに体験してほしいと願う。

JACの「山の日」は「山に登る日」で取り組みを

2016年に国民の祝日「山の日」が施行されて以後、4回の記念全国大会が開催された。第1回の上高地では皇太子殿下(今上天皇)ご一家が出席された。2回目の那須、3回目の大山、そして今年の甲府と、記念大会は開催地にふさわしい趣向で盛り上がった。式典は県や市町村中心で企画、運営され、日本山岳会をはじめ山岳団体の出番は少なかった▼多くの会員から「山の日」はセレモニー化していいのかと問われ、考えた。もちろんNOである。日本山岳会としてどう取り組むべきか。我がクラブがベースに置くのは山登りだ。《山に親しみ山に登る》を柱に、知識と経験、安全確保、山の環境保全などを考えるべきではないか▼「山の日」では先を歩いている方たちがいた。その筆頭が山梨である。山梨ではこの20年余、登山を含め多彩な「山の日」関連行事が登山シーズンに盛り込まれていた。もう一つ直近の例を挙げれば、来年、記念全国大会を開催する大分――。当会東九州支部が山岳連盟、労山、全九州のガイド・グループと連携して、すでに4回の「山の日登山」を実施している。心強くも励みになる公募登山の積み重ねだ。今後ともこうした支部、地域単位の取り組みに期待したい。

(成川隆頭)

ている。

例えば20年余、県、地域の「山の日」活動と取り組み、今年、県都・甲府市で第4回「山の日」記念全国大会の開催を迎えた。山また山の山梨県が祝日「山の日」で活気付けていることに感慨を覚えながら、山の仲間と一緒に一日を過ごした。

(山梨支部事務局長・古屋寿隆)

REPORT

第4回くまもと「山の日」登山祭を
阿蘇・杵島岳で開催

熊本支部長 中林暉幸

「ふるさとの山に登ろう、熊本の自然を守り育てよう」をスローガンに過去3回実施してきた、くまもと「山の日」登山祭は今回、第4回を迎えた。当初、第1回に行なう計画であった熊本を代表する山阿蘇が、思いがけない熊本地震で悲惨にも崩壊し、場所の変更を余儀なくされた。爾来3年、まだ復旧・復興途上ではあるが、4回目の今年、阿蘇・杵島岳で実施する運びとなったのは素直に嬉しい。

実施計画に当たっては、共催の熊本県山岳連盟と日本山岳会熊本支部の打ち合わせも、今回4回目となり、メールなどを活用することで会合の回数も少なくして、できるだけ負担軽減に努めた。最大の課題は、多数の参加者を考慮すると、駐車場の問題と数百人が入れる広さの頂上などを考慮しなければならぬ。諸般の事情を考慮して、草千里駐車場から杵島岳登山に決定した。地元自治体の阿蘇市をはじめ、山の店シエルパ、好

日山荘熊本パルコ店、モンベル南阿蘇店、そして今回、初めて(株)大塚製薬工場の後援も得られ、昨年好評だったくまモン缶バッジ、そして経口補水液OS-1の提供を得ることができた。

開催日が近づくにつれて、いつもの台風が接近して天候が心配され、また、中岳の火山活動の活発化も気懸かりであったが、幸い台風は9号と10号の合間を縫う形となつて、なんとか予定どおりの実施となった。

当日は午前7時、参加者受付の草千里駐車場に役員が集合。下界は晴れていたが標高1100m余の駐車場付近は強風、上空には火山灰を含む噴煙混じりの雲が南東の風に乗って杵島岳頂上付近を覆っている。状況次第では登山活動の変更も考えながら、受付準備を進めていく。

8時30分の受付を始めるころには次第に雲は高くなり始め、噴煙もいくらか杵島岳直撃から外れる

方向に見える。ただ、降灰の影響を考慮してAコース予定の火口跡一周は断念し、頂上火口周囲に短縮することに決める。予定どおり9時から開会式を開始、主催者挨拶、諸注意の後、A、Bコースの順に登山開始した。強風曇天のため、事前に心配していた熱中症の心配はほとんどなさそうで幸いではある。参加者はおよそ200名弱、子ども連れの参加者もかなりあるのは嬉しい。

登山開始40分弱で杵島岳頂上到着。まだ雲は多いが、頂上からの眺望も望めるくらいに雲は高くなってきた。火山灰の心配もない。帽子が飛びそうな風は相変わらずである。登山者全員が登頂したところで頂上集会開始。工藤実行委員会委員長の講話、そして高体連代表の高校生の日宣言、改めて山の日の意義を考えさせるイベントも順調に済ませることができた。

その後集合写真を撮り、Bコースはそのまま下山を開始、Aコースは頂上火口を反時計回りに周回して、

11時半ごろには両コースとも草千里駐車場に帰着した。簡単な閉会式を行なって無事終了、予定のコースを短縮したため早い時刻での終了となった。

物足りない健脚組は、思い思いに中岳方面あるいは鳥帽子岳へと足を延ばす者も見受けられた。県内の報道機関3社も取材に見えた。多くの県民が山の日意義を再認識してくれる機会になることを祈念しながら片付けを終え、役員も解散となった。



鳥帽子岳と草千里ヶ浜を背に杵島岳へ向かう

REPORT

天山山脈・ウチーティリ峰登山報告

—北海道支部創立60周年を目指して—

京極紘一

今夏、北海道支部会員10名は中央アジアの天山山脈北部に出かけ、キルギスアラトーのウチーティリ峰(4540m)に登山した。

この企画は、当支部が来る創立60周年記念に向けて、中央アジアの高峰登山のきっかけとなることを目的として実施したもの。当支部がテーマとして進めていた、オ

ホーツク圏の千島列島登山がアプローチや国際的な事情から早期実施が困難となったため、代替的な



モレーンの脇に立つアクサイ山小屋

アプローチで実現可能な舞台を中央アジアの天山山脈に求めたものである。また、登山に加えて氷河地形の学習、高山植物の観察、現地キルギス山岳会との交歓、シルクロードの玄奘三蔵法師の史跡探訪なども盛り込んだ。

ウチーティリ峰登山

2019年8月7日、キルギス共和国の首都ビシュケクの街を抜け、ポブラ並木の舗装路を南へと走ると次第にキルギスアラトーの山々が近付いてくる。氷河からの白濁した流れに沿って大きな谷に入っていくと、アラアルチャ国立公園だ。登山口のアラアルチャ・ホテルに泊まる。標高は2200m。気温は37℃。一帯はテンシャン・トウヒやモミの針葉樹およびコノデカシワなどが茂る深い谷の中で、上流には雪を抱いた岩峰が夕日に染まっていた。

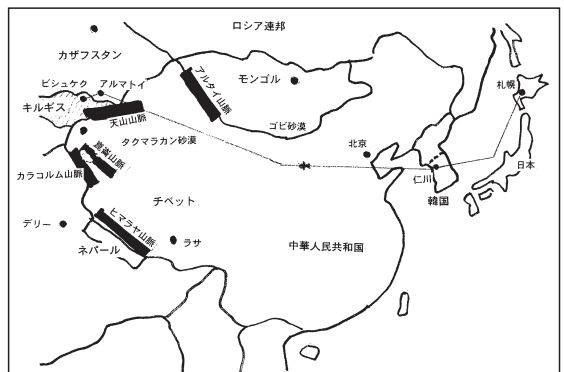
翌朝、キルギスのスタッフの3人と合流。8時45分に出発。針葉

樹林を抜け出すとアクサイ谷の広い谷が展開。ここで渡辺二教授(北海道大学)から氷河地形のレクチャーを受ける。お花畑の台地から山腹をトラバースするように谷の奥に向かう。支沢を渡った先で休憩。岩壁脇のサイドモレーンを急登していくが、足元にはフウロ、ナデシコ、トリカブト、エーデルワイスなどが咲き続く。

喉のどのような谷の狭まりを抜けると谷は開けて、モレーンの脇にアクサイ山小屋があった。15時着。標高は3200mで、多数のテントが張られていた。山小屋の蚕棚のような部屋に荷を置くと、外に設けられた食堂テントでくつろぐ。渴いた喉に甘い紅茶やクッキーがうまい。周辺を少し散策しながら渡辺先生から氷河地形の話を聞く。夕食は午後7時。パスタと肉入りスープ、パン、サラダと美味しく満足。

3日目、今日は高度順化を兼ねて氷河湖へのトレッキングだ。早朝に近くのモレーンに珍しいアイベックス(山羊)2頭が現われ、撮影に成功する。

モレーンの碎石を登ってウチーティリ氷河に入る。右手にはアク



サイ氷河の巨大な氷瀑があり、圧巻である。ここで渡辺先生の講義が始まる。100年前の氷河の姿を想像しながらの話はロマンあふれ、全員聞き入ってしまう。さらに進むとモスグリーンの水を湛えた氷河湖があった。氷河の水でオンザロックを味わう。午後は休養。夕方から雨が降り続き雷も鳴る。次の日、昨夜の雨は上では雪だったようで、山頂付近は白くなっていた。6時に出発。気温が下がり冷気が気持ち良い。左手のウチーティリ峰に向かう道に入る。小さな流れが湧き出している所から大きなガレ場に変わり、歩きづら



無風快晴のウチーティリ峰山頂で記念写真に収まる



ウチーティリ峰山頂からの大展望を満喫する

くなる。左の岩稜を回り込むと支尾根に向かってガレた斜面が展開し、その中をジグザクにたどる。赤茶けた壁に沿って登り切ると広い尾根に上がった。ここまで1時間半、一気に展望が開け、アクサイ氷河を囲む岩峰が壁のように連なり、アルペンのな景観である。昨日の氷河湖も見える。

岩屑だらけの歩きにくい登りは相変わらず続く。4000mあたりから昨夜の雪が斜面に残る中を登る。2本の岩塔が立つ通称「ウサギの耳」で大休止。10時、高度計は4245mを示している。最後の登りに備えてサンドイッチとリンゴを頬張る。さらに岩が累々とす

る斜面を斜めに登っていき、主稜線に出たのが11時。尾根上は雪庇が反対側の谷に張り出しており、その白さがひととき眩しい。主稜線をたどって11時30分、4540mのウチーティリ峰に立った。

雲一つない無風快晴の頂だ。眺望は遠大で、すぐ先に氷壁の上に岩を巡らせた最高峰のセミヨノフ峰(4875m)があり、その右にコロナの岩峰、さらにはカリア峰、ボックス・ピークなどの峰々が壁のごとく連なり、その下にアクサイ氷河がクレバスの縞模様を表面に刻み込んで谷を流下している。さらに奥には雪を抱いた山々が延々と浮かび、霞に消えている。

振り返ると、褐色の山々が平原に沈み込んでいく先にビシケクの街が見える。頂上ではお決まりのポーズで旗を広げ、記念写真を撮る。大展望を堪能しつつ滞頂は1時間半にも及んだ。

未練を残しつつ13時に下山。下りはさすがに長く感じたものの天気は崩れることなく、山小屋への帰着は16時半だった。早速、売店でビールを買い込んで一同食堂テントに集まり、豊かな気分登頂を祝って乾杯した。

キルギス山岳会との交歓

下山後に、キルギス共和国の首都ビシケクの中心部から西にあるキルギス山岳会の事務所を、西山泰正隊長ほか渡辺、京極の3人が表敬訪問した。

事務所は大通りに面した所にあつて、広い敷地を有していた。スタッフの女性に案内されてキルギス山岳会会長室に入り、ウラジミール・カミサロフ会長に迎えられた。挨拶に始まり、西山隊長からキルギスで有意義な楽しい登山できたお礼を述べた後に、北海道支部の登山の現状を説明、続いてウラジミール会長からキルギス登

山界の状況へと話が進む。

会長が自らいれてくれる紅茶を飲みながらの意見交換では、北海道支部の若手とキルギスの若手が毎年、技術交流などの機会を持つるように、交流協定書や覚書の交換といった形にしたいとの会長の強い想いが伝わってきた。会長の意向に沿うことができるかどうか、当支部の現状を鑑みると、この提案に真摯に向き合えるか、一抹の不安が残ったのも事実である。

次にキルギス山岳会オリジナルTシャツと版画数枚が贈られ、我々も日本山岳会に提供していただいた『日本山岳会百年史』や写真集、さらにはパンダナなどの記念品を贈呈した後、北海道支部からのおみやげを手渡し、記念写真に収まった。広い敷地には登山に使う幾台もの大型専用車やミーティング室、登山用具室、燃料室などいろいろな施設があつて、会長自ら案内してもらった。

この後、会場を市街のレストランに移して、今回の登山に参加した全隊員と会長とキルギス山岳会の若手会員でキルギスの伝統料理をいただきながら交歓を行ない、大いに盛り上がった。



平井吉夫(ひらい・よしお)

会員番号8312

翻訳家（ドイツ語）、編集者。ドイツ語の翻訳書は100冊を超える。山岳書ではR・メスナー著『裸の山』（山と溪谷社）がある。

1938年生まれ。甲南中学・高校（山岳部に所属）を経て1964年、早稲田大学文学部卒業。出版社勤務の後、1971～76年 チェコ、オーストリアに留学（ヨーロッパ戦史研究）

1977年 日本山岳会入会

1983～86年 日本山岳会理事のほか「山日記」編集代表、図書委員会委員長を歴任

2019年5月24日逝去、享年80

追憶 平井吉夫君のこと

越田和男

今年に入り、図書委員長の三好まき子さんが亡くなり、彼女を偲ぶ会がついに先ごろ催された。その発起人に名を連ねていた前委員長平井吉夫君（以下、敬称略）が、その会に出席することも叶わず、12年に及ぶ闘病の末、5月に亡くなった。平井と私は、神戸の甲南中学・高校以来70年近くの長い付き合いだったので、ここに追悼の拙稿を綴らせていただく。

追悼

OBITUARY

彼が「大腸癌らしい」と打ち明けたのは、初冬の伊那谷でのこと。彼の悪い予感のは、緊急入院だと言つて電話してきたのは、帰京後間もなくで、これが長い闘病の始まりだつた。8時間に及ぶ最初の大手術で、さすがの彼もげっそり瘦せたが、以後、諸々の抗癌治療で入院を繰り返しながらも、実に病人らしくらぬ振る舞いで酒も煙草も人以上、皆を驚かせた。

そして3年前、今度は肺癌が見付かり片肺を全摘後、残った肺にも2ヶ所に癌。さすがに駅の階段

がきついとぼやき出したが、それでも図書委員会などには顔を出し、二次会まで付き合っていたし、自宅に見舞つたときも、鼻に酸素チューブを突つ込みながらも奥さんの手料理でよく飲み、愉快そうに語らつた。亡くなる前月のことだ。

山登りでは彼は早熟だった。中学入学直後からの山岳部員で、芦屋のロックガーデンでみっちり基礎訓練を受けて、穂高の涸沢合宿に臨み、前穂・北尾根、ジャンダルム・飛騨尾根、北穂・滝谷の第2尾根などは中学2年で、中3になると、積雪期の不帰第1峰尾根に挑戦した。高校時代も積雪期はもっぱら後立山に通い詰めていた。部活動のかたわら単独行も好み、穂・穂高縦走や劔の八ツ峰なども独りでこなし、高校2年時には兵庫県代表に選ばれて、神奈川（丹沢）国体に参加した。

彼の左傾が顕著になるのはこのころからで、旧制甲南高校以来の妙な伝統、「山岳部に入るとアカになる」を受け継いだ最後の人物となった。日焼けで真っ黒けの私と並んで歩いていると、級友が「赤と黒が来た」と指さした。

高校卒業後は、甲南大学へ進ま

ず上京し、数年の浪人生活の後、早稲田に入学するころには左翼の闘士で、「社会学」とかの副委員長を務めていた。この方面の人脈は広く、「九条改憲阻止の会」など今に続く。晩年監事を務め、奥さんとともに尽力した「福島原発行動隊」が最後の仕事になった。頑固一徹、正義派ぶりにはついていけない面が多かったが、山仲間には強要することはなかった。

山で大怪我をさせたこともあった。昭和44年の晩秋、劔岳北方の毛勝山。ルートを間違え深夜の大明神沢を下降中に、落石の下敷きになり左足首を複雑骨折、あわや遭難事故となりかけた。60歳前後には、カラコルムやヒンズー・クシュに何回か通った時期もあり、「トレッキングか」との私の問いに「いや違う、登山だ」と言い張っていた。それでも、のちに私が誘ったブータンのトレッキングは気に入ったらしく、今度は彼の発案でスロヴァキアの高タトラ山脈南麓の旅とともに楽しんでらした。

80歳は今どき少々早い。もう少し一緒に山を歩きたかったし、福島原発の廃炉の行方も見極めてもらいたかった。



馬場勝嘉(ばば・かつよし)

会員番号2674 永年会員

1925(大正14)年4月17日生まれ

2019年6月13日逝去、享年94

2009年『ヒマラヤ登山記録集成』(全2巻:第1巻2007年、第2巻2008年、白山出版社)により「平成21年度秩父宮記念山岳賞」を受賞。そのほか『ヒマラヤ・クロニクル』(全2巻:第1巻2018年、第2巻2019年、北国新聞出版局)、〈共訳〉アーノルド・ラン『世界山岳名著全集別冊:登山百年史』、〈共著〉『立山・剣岳・毛勝三山・黒部溪谷』(アルパイン・ガイド)、『立山・剣3000mの旅』(アルプスシリーズ)などがある。

馬場勝嘉さんを偲ぶ

津田文夫

事の発端は松田雄一さんの電話から始まりました。

『日本山岳会百年史』も終わったはずなのに、と電話に出ると「今回、馬場さんを次回の秩父宮記念山岳賞に推薦したいので、石川支部から推薦状を出してほしい」とのこと。

私たちは喜んで引き受けなければ、その後が大変。当の本人が「そんな賞などんでもない、辞退す

追

OBITUARY

悼



る」

「まして本部の年次晩餐会へ出席し、あろうことか皇太子殿下と同席するなど畏れ多い。賞も出席も辞退する」と、「辞退する」ばかり。

ご家族からの応援をいただき、なんとか不承不承でも一件落着したものの、当日までハラハラの連続でした。

石川支部は昭和22年に設立されましたが、設立発起人ではないけれど、山岳写真が縁で翌昭和23年3月、支部挙げての積雪期白山初縦走に馬場さんも参加されて以降、

ずっと当支部を支えていただきました。表に立つのは好まれず、常に苦勞する裏方を選択されるのが馬場さんでした。

特筆すべきは国内外の登山記録の収集、研究では他の追隨を許さぬ実力者であり、多くの山岳人の陰の立役者としても著名でした。

ご本人は「ノリとハサミだけ」が口癖でしたが、いつお宅に伺っても、その温和なお人柄について長居して、仕事の邪魔をしてしまうことも多かったような気がします。

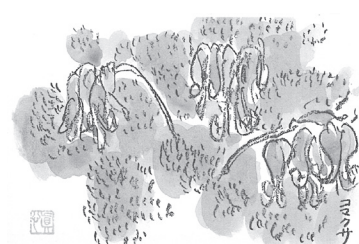
その実績を買われ、日本山岳会百周年記念事業では、松田雄一氏の下で『日本山岳会百年史』の編纂をされました。

著書、訳書の出版も多かったけれど、渡部温子氏の助けで『ヒマラヤ登山記録集成』副題「日本人の天空に輝く軌跡」(第1巻2007年9月、第2巻2008年9月)を発刊。これにより前述の秩父宮記念山岳賞を受賞された次第です。第1巻は出版部数が少なくてほとんどの人が入手できず、秩父宮記念山岳賞の選考委員にこの本の現物を見てもらうために、松田さんが大変な苦勞をされた、とご本人から伺いました。

手を尽くしても第1巻が入手できなかったある会員が、直接手紙で馬場さんに直訴。後日、全ページのコピーがその会員の手元に届いたということでした。その方は面識はなく、脚も不自由だったけれどお通夜の席にお別れに来たというエピソードもありましたが、馬場さんの、相手のためにできることはなんでもしてあげたいという誠意には、簡単に真似のできないものがありました。

ご遺族の「私たちの父の思い出は、いつもパソコンに向かっている父の後ろ姿でした」という言葉に、私たち会員が氣樂に馬場さんの温容に接していたことが、どれほどすばらしいことだったのかと氣付き、今、改めて感謝いたします。

合掌



N 東 西 南 北 S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

小島烏水の自筆原稿

北村武彦

80代半ばを過ぎて、さすがに山登りがしんどくなった。なれば山登りに費やした時間を、所蔵する山の本の読破に振り向けようとする意欲が湧いてきた。まず、最初に手を付けたのが小島烏水の著作であった。

烏水は登山家であつたばかりでなく、文学など諸事万端にわたる文筆家・評論家であつた。烏水の著作は、処女出版の『扇頭小景』をはじめとするほとんどの単行書を私は所蔵している。しかるに、これらの本は書棚に雑然と埃を被つたままだつた。これではいけないと整理してみると、和綴じされた「曲亭馬琴と歌川廣重の關係」と題する烏水の自筆原稿が、帙状の函に収められているのを書棚の隅に

見付けた。自筆原稿は「創作用紙」とあり、200字詰、頁が打たれ41枚あつた。

件の1枚目の原稿の欄外には、編集者に依ると思われる「第二頁より始める」という朱書が記され、朱書の句読点が打たれていた。案ずるに、これは何かの雑誌に寄稿されたものと思われた。

それではその雑誌を突き止めようとネットで検索を試した。すると、昭和3年発行の『浮世繪』第2号に掲載されていることが判明した。

この雑誌『浮世繪』は、大正4年、神田淡路町の酒井好古堂によって創刊され、大正9年9月まで6年にわたり55冊発行された。次いで、昭和5年から刊行された大修館書店の『小島烏水全集』14巻に当たつてみた。浮世絵関係の収録は、第13巻と第14巻にあつた。

第13巻（昭和59年3月発行）には単行書『浮世繪と風景画』および単

行書未収録分は「浮世繪募集おぼえ帳」と題して26編をまとめている。なお、未収録記事の発行誌は最も多いのが『浮世繪』、ついで『みずゑ』『美術画報』である。

第14巻（昭和61年9月発行）には、単行書『江戸末期の浮世繪』『三世歌川大首繪集』『小島烏水翁募集浮世繪目録』および単行書未収録分は『美術随想』と題し、36編を収めている。その中に、『浮世繪』第2号掲載、昭和3年3月発表の件の「曲亭馬琴と歌川廣重の關係」が掲載されていた。

さて、『浮世繪』第2号の存在が確認できたので、国立国会図書館にその所蔵を問合せると、所蔵しているとのことだった。そこで山梨県立図書館を通じて、件の本文と当該雑誌の表紙の送信サービスに依頼した。かくしてそれらの複写物を手入したが、本文は2頁から10頁にわたつていた。

ついでながら述べると、小島烏水が浮世絵に関心を持ったきっかけは、槍ヶ岳に一緒に登った同じく横浜に住む岡野金次郎と2人で、横浜山ノ手の外人居留地にウォルター・ウェストン宅を訪れたときであった。書斎に案内されて、そ

こに北斎の「富岳三十六景の内の程ヶ谷」の原版が額にして掛けられていたのに触発されたことだった。時に明治36年2月10日の数日後であった。その際、ウェストンから熱心に山岳会の設立を慫慂されたことは、有名な我が国登山史の一齣であつた。

烏水は、先に触れた「浮世繪募集おぼえ帳」で次のように述べている。「私が浮世繪を募集しようとした動機は、第一に日本山岳の愛好者、ウェストンの書斎で見て欲しくなったことと、第二に山岳会展覧会の出品の員数に備えるため買いに出た先で、浮世繪の手ほどきを教えられたこと等……それはともかく、今まで私の浮世繪募集品が、風景画におのづと限られてゐるのは、素と素と山の方から入つて来たためである」（註…全集13巻409頁）

近藤信行氏は、「解題解説」の中で次のように指摘している。

「彼が本腰を入れて募集し、研究に着手したのは、登山趣味、山岳研究の延長線上にあつて、必要にせまられつゝ、少年時代を振り返りつゝ、はじめられたといえるだろう。」（註…全集13巻699頁）

因みに、烏水が浮世絵に関する文章を日本山岳会機関誌『山岳』に初めて寄稿したのは、大正2年12月発行、第8年第3号の「風景画家歌川廣重傳」（未定稿）である。

なお、『山岳』第44年第1号「小島烏水号」には、浮世絵研究の泰斗、藤懸静也氏の「浮世絵研究家としての烏水先生」がある。烏水の浮世絵研究の過程とその業績を紹介した後、余録に次の文章がある。

「先生がなぜ浮世絵を研究されるようになったのであらうかと奥様に尋ねた。このお答は次のようである。確かにとは申されませんが、小島の家は讃州高松の松平家に仕えて、祖母の常妙院様のおつきで、おもり役をしてゐましたが、錦絵を澤山愛蔵してゐました。小島は子供の時から、それを見て楽しんでゐたそうです。そのことは、版画の好きになる原因の一つではないかと思ひますと。」

●小島烏水浮世絵関係著書

『浮世繪と風景画』大正3年8月5日 前川文栄閣発行 菊版箱入 本文62頁 図版40葉 定価3円 『江戸末期の浮世繪』昭和6年4月10日 梓書房発行 四六倍判 布装箱入259頁 図版58葉 定

価7円50銭 『三世歌川豊国大首役者絵集』300部限定版 編纂者小島烏水 昭和5年11月1日

丸美屋浮世繪部発行 四六倍判 布装箱入 定価10円 解説47頁 図版72葉 挿絵8葉

活動報告

山行委員会

熊野古道・小辺路を歩く

当会への入会の契機になった大峰奥駈道に参加してから、折に触れて小辺路を歩きたいと思つていたので、会報を見て早速参加申込みをした。せっかくの機会を得たので、事前に九度山から町石道を歩き、高野山に入つた。

5月17日夕刻、宿坊蜜巖院に参加者11名が集合。自己紹介や近況報告を兼ねて話が盛り上がり、その勢いのまま、夕食の精進料理をいただきながら、和気あいあいの宴がさらに続いた。

5月18日、曇り空の下、蜜巖院出発。金剛三昧院の横の坂道からが小辺路だ。総行程約65kmの旅が

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です。

スタートした。本日の歩行距離は大股までの16・9km。ろくろ峠、薄峠、大滝集落、高野龍神スカイラインを歩き、水ヶ峰分岐、屋敷跡、今西辻、平辻の道標地蔵に古道を偲び15時40分、大股登山口到着。ホテルの送迎バスが来たときの皆の笑顔が印象的。宿泊先は村唯一のホテル「のせ川」。

5月19日、ホテルの送迎バスで大股登山口へ。8時出発。本日の歩行距離は三浦口まで13・9km。桧峠、伯母子峠、伯母子岳（1344m）と急登が続く。11時40分、伯母子岳山頂。大峰の山々が眺められると期待したが、ガスが上がり風も強いことから早々に下った。15時55分、三浦口着。宿泊先は民宿「岡田」。周辺は宿が少なく、宿

泊先の宿も以前の被害の影響がいまだに残っていた。

5月20日、三浦口7時50分出発。本日の歩行距離は戸津川温泉まで17・1km。県道を渡り、前日の大雨で濁流と化した川に架かる吊り橋を恐々渡る。このときが一番必死だった。民家の間の坂を登り続けると、樹齢500年の巨大な杉の木が並んでいる吉村家跡に着いた。石垣や田んぼの跡もあり、宿泊所だったよう。道筋には参詣道として、往時の歴史や暮らしを偲ばせる所が随所に感じられ、とても感慨深い。三十丁の水場でひと息入れ、三浦峠まで登り続ける。9時50分三浦峠。下って出店跡、矢倉観音堂を経て、12時25分西中バス停。十津川温泉までバス道を7・3km、2時間歩く。途中から雨も降り出してくる。宿泊先は十津川温泉「ホテル昂」。

5月21日、今日は最終日。6時25分ホテル出発。幸いなことに、紀伊半島を襲った大雨をやり過ごし、今日は晴天。歩行距離は、熊野本宮大社まで14・4km。果無集落はさすがに「日本の里100選」に選ばれた村。一輪の花にも暮らしを大切にしている良き姿が残る。峠

の道には三十三観音像が置かれ、観音道や三十丁石を過ぎる所で本宮町を望み、熊野本宮が近付いていることを実感する。11時30分、八木尾に到着。道の駅ほんぐうで昼食をとり、急ぎ本宮大社を目指す。三軒茶屋跡から中辺路と合流して展望台を回り、祓殿王子跡、大社裏鳥居をくぐり抜けて、本宮大社に詣でた後、互いに健闘を称えて再会を約し、散会した。

(北海道支部・銭亀三佐子)

「太平山、秋田駒ヶ岳と乳頭温泉」に参加して

秋田に行くのは子どものとき以来なので、秋田支部の方々と一緒に登山ができ、以前から憧れていた乳頭温泉・鶴の湯にも泊まれるという魅力に惹かれ参加を決めた。

折しも、秋田支部は今年創立60周年。支部の方々が日ごろから登山道の整備などで深く関わる太平山で本部山行委員、全国の会員とお祝い懇親会をするとは、なんと素敵な企画であろうか！

7月13日、11時40分、秋田駅に集合。バスで太平山旭又登山口に移動した。秋田支部の2名の男性

がお出迎えくださり、支部の方お手製地図、「太平山の道しるべ」を配布してくださった。良く整備された天然秋田杉の道を爽快に歩いていくと、次第に美しいブナの森へと移行した。道も険しさを増してきて、3時間近く急坂と闘い、尾根に出ると山頂の社殿が見えてきた。「おーい」と山頂から手を振っている方々の姿が見えた。山頂に到着すると、鈴木・秋田支部長はじめ、秋田支部の方々が握手で大歓迎してくださった。すぐに参籠所で懇親会が始まる。差し入れ盛りだくさんの豪華な宴会。

18時半過ぎ、表に出ると先ほどまでの濃いガスが切れて晴れ渡り、南に鳥海山、東に早池峰山、北に森吉山、そして西には日本海の向こうの男鹿半島に沈む美しい夕日を望むことができた。まさに360度の大展望に感激だった！

翌朝5時30分、三吉神社本殿の朝のお勤めに全員が参加し、玉串奉納。お祓いを受け、神聖な気分で朝食後下山開始した。

下山後、仁別温泉でさっぱりしてから、秋田の郷土料理の昼食、田沢湖駅に移動した。そしてこの日の宿は、待望の乳頭温泉・鶴の湯

寄附金および助成金などの受入報告

(令和元年8月31日まで)

寄附者など	受入金額など (単位千円)	寄附の目的、その他
(株)中央アド新社	50	高尾の森づくりの会 活動への支援
三井住友信託銀行	200	高尾の森づくりの会 活動への支援
グローリーエンジニア リング(株)	50	高尾の森づくりの会 活動への支援
アサヒビール(株)	100	高尾の森づくりの会 活動への支援
伊藤ハム(株)	50	高尾の森づくりの会 活動への支援
コニカミノルタ ホールディングス(株)	200	高尾の森づくりの会 活動への支援
電源開発(株)	100	高尾の森づくりの会 活動への支援
富士電機(株)	50	高尾の森づくりの会 活動への支援
エリオニクス(株)	100	高尾の森づくりの会 活動への支援
東明 裕 会員	50	岐阜支部へ (新入会員の入会金補助)
梅田 直美 会員	10	岐阜支部へ (新入会員の入会金補助)
古野 淳 理事	30	越後支部運営費用
松野 賢珠 会員	15	有志からのご寄附のお願いに 対する永年会員からのご寄附

である。まるで時代劇のセットのような茅葺き屋根の家屋が並ぶ敷地に入っていくと綺麗な川が流れていて、その向こうに温泉棟が見えた。宿は秘湯情緒たっぷり、レトロ感満載の建物。夕食も名物の山の芋鍋をはじめ、イワナのお刺身や山菜料理など、食べ切れないほどの馳走が並んだ。そして温泉は白湯や黒湯の内湯や露天風呂がいくつもあり、これまた入り切れないほどの数であったが、個人的には混浴も含め、すべての温泉を制覇して大満足だった。

最終日、いよいよ秋田駒ヶ岳に登る日だ。前日に駆け付けてくだ

さった日本山岳会編『日本三百名山』の「秋田駒ヶ岳」の項を執筆された秋田支部の今野氏のご案内で、八合目から新道コースで阿弥陀池を巡り、希望者のみ男女岳をピストンし、焼森コースを下山した。今野氏のお勧めどおり、焼森山頂では満開のコマクサに出会えた。阿弥陀池畔では同氏によるお点前と羊羹のふるまいがあり、なんとお驚沢な山行となった。

数え切れないほどの高山植物の花々、田沢湖のコバルトブルー、緑深く美しいムーミン谷(馬場の小路)。秋田駒はすばらしい天空の散歩道だと思った。(吉川三鈴)

支部



だより

越後支部

「山の日」第3回糸魚川・世界ジオパーク「子ども登山教室」

越後支部では「山の日」の記念事業として、糸魚川市の山域で「子ども登山教室」を実施している。主に小学生を対象に「次世代を担う子どもたちに山の自然に親しむ教室を提供することで、子どもたちが豊かな自然のすばらしさやその自然を守り育てていくことの大切さに気付くこと」を目的とし、平成29年の第1回から、参加した子どもたちの成長に合わせながら登山の標高を高めて、5ヶ年計画で展開している。

第3回となる本年は、亜高山帯から高山帯での自然観察と本格的な夏山登山体験とし、蓮華温泉(1475m)から天狗の庭(2093m)を経て白馬大池(2380m)

までの往復を実施した。8月1日、糸魚川市根知・大神堂区公会堂にて、参加する子どもたちと保護者、桐生恒治・実行委員長をはじめ、運営スタッフを含めた32名が参加して事前学習会を実施した。

開催日前日の8月10日、運営スタッフが根知・岳修山荘に集い、当日の日程説明と役割分担、行動の注意点等の最終チェックを行った。特に安全確保の態勢や緊急対応について重点的に協議した。「山の日」の8月11日は、期待どおりに絶好の登山日和となった。今回の参加者は子ども12名、保護者5名。運営スタッフは本部、各班のリーダーと支援、救護、応援支援の22名である。

子どもたちが蓮華温泉に到着し、すぐに蘆本総括リーダーから運営スタッフに子どもたちの体調チェックやトイレへの誘導などの声が掛かる。全員元気な様子で、緊張

全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

感は感じられない。

蓮華温泉ロッジ前の広場に全員が集合し開会式を行なった。桐生実行委員長の挨拶の後、応援スタッフの糸魚川消防署の丸山優氏の紹介、準備運動、記念撮影を行なう。

8時45分過ぎに、参加者は4班に分かれて出発した。第4班は低学年児童の班なので天狗の庭までの往復である。ダケカンバの茂る中をゆつくりと登り始める。シラカバとダケカンバの特徴の違いが分かる子どももいて、事前学習会でしっかりと学んできているようである。登山コースの難所と思われる急斜面のトラバースもスムーズに通過し、最年少の1年生女子も元気に登っている。

11時ごろには中間地点の天狗の庭に到着した。展望が開けて目の前に雪倉岳や朝日岳が大きくそびえる。子どもたちは初めて見る展望を写真に収めていた。登り始めはほとんど会話がなかった彼らも慣れてきたのかお喋りをするようになる。オオシラビソやコマツガの木々が香る中を順調に登り続ける。木々の香りで身体がリフレッシュするようである。

ハイマツ帯になり、羽毛状にな

ったチングルマが一面に広がる開けた場所に出た。班によって時間差はあったが、12時半を前後して全員が白馬大池に到着できた。

大池周辺は登山者で賑わい、山荘のキャンプサイトは色とりどりのテントが立ち並んでいた。子どもたちは周囲の賑わいの中で素早く昼食をとり、班ごとに記念写真を撮影して、白馬大池を後にした。

出発から約7時間、心配された熱中症も高山病もなく、全員無事に蓮華温泉に到着した。予定時刻を超えていたため、慌ただしく着替えを済ませての閉会式となった。小林勇副実行委員長の挨拶の後、参加者と運営スタッフがお互いにお礼の挨拶をして解散となった。

初めて2300mを超える本格的登山を体験した子どもたちの感想は一人一人様々であるが、この登山教室の1日が夏休みの大きな思い出となり、自分の生まれ育った郷土の山のすばらしさを感じ取ってくれたと思う。

次回第4回は蓮華温泉で1泊して経験を積み、最終第5回は新潟県最高峰の小蓮華山(2766m)を目指す登山を予定している。

私は、成長した子どもたちの笑

顔を見ながら再び一緒に登りたいと願っている。(知野勇人)

東九州支部

第10回「くじゅう・山の安全を祈る集い」

8月4日(日)、東九州支部と法華院温泉山荘との共催という形で実施し始め、記念の10周年を迎える「くじゅう・山の安全を祈る集い」は今年も晴天に恵まれて、にぎにぎしくしめやかに執り行なわれた。

九州本土最高峰の中岳(1791m)から南西方向に直線距離で400mほど離れて、中間にある御池を挟んで対峙する丘の上にある石碑の前で行なわれる慰霊祭と安全祈願祭である。一般登山道から離れているせいもあり、ここを訪れる人は少ないが、この慰霊碑は今を去る89年前の1930(昭和5)年8月、記録に残るものの中では九重連山で初めての遭難事故の犠牲となった2人の若者のために遺族が建立したものである。

碑は長年の風雨により土台が崩れて、長い間倒れたまま放置されていたが、10年前に我が支部会員とその仲間たちが機材などを担ぎ

上げて、巨大な石碑を起こし、土台部分を修復する作業を行なった。それを記念して慰霊祭を平成20年8月8日に、法華院温泉山荘の社長であり、法華院白水寺第26代院主でもある弘藏岳久氏の読経の下で行なったのが始まりである。

支部は翌年の定期総会でこの行事を「くじゅう・山の安全を祈る集い」として、一般登山者にも参加を呼び掛けて毎年8月第1日曜日に、法華院温泉山荘との共催で、遭難碑前での慰霊と山の安全を祈る祭を行なうことを決めたのである。

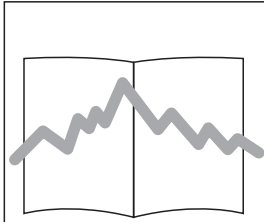
最近4年ほど毎年好天の下で



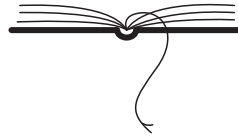
2018年12月
山と溪谷社刊
四六版254頁
定価1600円+税

鷹と生きる 鷹使い・松原英俊の半生

谷山宏典著



図書紹介



今や数少ない（どころか最後の一人となった）鷹使い・松原英俊さんの生い立ちと半生を、インタビュと狩りの現場に立ち会いながら書かれたものだ。かつて、鷹狩りは職業として成り立っていたが、今や自然環境の変化で猟場が少なくなり、ウサギの肉や毛皮の需要もなくなって、「生業」としての「鷹使い」は成り立たないらしい。

実施しているが、初回の慰霊祭からなぜか毎年この日は雨天や悪天候。時には避難小屋の中で実施したことや台風の影響で、遠く離れた法華院温泉山荘の観音堂で実施したこともないか、などとささやき合っていたこともある。

今年は朝から雲一つない青空で、真夏の太陽がまぶしい天気であった。午前8時前、牧ノ戸峠から登る組は小さなくつかの団体とな

って出発していく。ほかの登山口から登ってきたメンバーも合せて、定刻の午前11時にそろったメンバーの下、弘藏院主の読経が始まり、参列者が順番に焼香して慰霊と安全祈願を行なった。

この日の参加者は支部会員26名と、弘藏院主のほかには、支部のブログや支部会員の口コミなどで知った一般参列者も入れて37名であった。

（飯田勝之）

図書受入報告(2019年8月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
日本山岳会宮城支部(編)	宮城山岳(No.23) 2019:宮城支部設立60周年記念誌	137p/26cm	日本山岳会宮城支部	2019	発行者寄贈
信州大学学士山岳会(編)	信州大学学士山岳会・信州大学山岳会 年報	337p/27cm	信州大学学士山岳会	2019	発行者寄贈
日本山岳写真協会(編)	協会写真展の歴史:日本山岳写真協会 創立80周年記念	36p/21cm	日本山岳写真協会	2019	発行者寄贈
日本山岳文化学会(編)	山岳文化につくした人々(山岳文化叢書 No.8)	240p/21cm	日本山岳文化学会	2016	発行者寄贈
日本山岳文化学会(編)	郷土の山(山岳文化叢書 No.5)	152p/21cm	日本山岳文化学会	2009	発行者寄贈
斉藤一男	登山史展望(山岳文化叢書 No.3)	99p/21cm	日本山岳文化学会	2006	発行者寄贈
日本山岳文化学会(編)	学校部会報(山岳文化叢書 No.2)	91p/21cm	日本山岳文化学会	2005	発行者寄贈
舟津圭三	犬ぞり隊、南極大陸横断す(30周年記念復刻版)	302p/20cm	セルバ出版	2019	出版社寄贈
渡邊明博	富士山絶景:撮影登山ガイド	223p/21cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
菊地敏之	クライマーズ コンディショニングブック	175p/21cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
半田久	誰でも登れる47サミツ(私家版)	239p/19cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
北山真(編)	日本100岩場/フリークライミング(増補改訂新版)	151p/21cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
田中康弘	山怪:山人が語る不思議な話(ヤマケイ文庫)	302p/15cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
大森久雄(編)	名作で楽しむ上高地(ヤマケイ文庫)	364p/15cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
岡田喜秋	名残の山路(ヤマケイ文庫)	254p/15cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
山口耀久	「アルプ」の時代(ヤマケイ文庫)	367p/15cm	山と溪谷社	2019	出版社寄贈
朝比奈耕太(編)	日本アルプス・ハケ岳中央線沿いの山(エムック No.4359)	144p/26cm	樺出版社	2019	出版社寄贈
朝比奈耕太(編)	日帰りて登る首都圏近郊の百名山(エムック No.4120)	144p/26cm	樺出版社	2018	出版社寄贈
朝比奈耕太(編)	冬こそ登りたい山(エムック No.4190)	144p/26cm	樺出版社	2018	出版社寄贈
朝比奈耕太(編)	いつかは挑戦したい難所のある山(エムック No.4163)	144p/26cm	樺出版社	2018	出版社寄贈
今坂純也(編)	丹沢・奥多摩登山詳細ルートガイド(エムック No.3773)	144p/26cm	樺出版社	2017	出版社寄贈
今坂純也(編)	日帰りて登る日本アルプス(エムック No.3841)	144p/26cm	樺出版社	2017	出版社寄贈
今坂純也(編)	ハケ岳 トレッキングガイド(エムック No.3815)	144p/26cm	樺出版社	2017	出版社寄贈

だが、松原さんはそれを承知の上で、少年時代からの憧れだった「鷹との暮らし」の願望やみがたく、山形の山奥に住む鷹匠に懇願して弟子入りした。

青森市に生れ、フツの家庭の子どもとして育てられ、東京の大学も卒業する。しかし、幼少時から野鳥や爬虫類に異常な興味を持っていて、飼育したり、山行中は蛇を捕って食べたたりと、破天荒な野生児として成長していく様子が詳しく語られている。

師匠の農業を手伝いながら、鷹使いとして一本立ちするまでの修行と暮らしは並外れた苦勞ぶりだったようだ。

雪深い北国の村の一軒家での原始的で野性的な生活に、松原さんの家族は幸せを見付けているように見えなくてもいいが、収穫は少ないし売れない日々、一家3人は常に貧困と隣合わせだ。そんな中で松原さんは、猟期が終わると国内の登山や沖縄暮らしを繰り返し、海外遠征へも参加し、単独で南米の山へ平然と出かけて行く。

深い雪の山での狩猟には並々ならぬ体力が必要だ。鷹使いの弟子はいないようだから、松原さんが

引退してしまうと、クマタカやオオタカを扱う伝統猟法は絶えてしまう懸念がある。

著者は、松原さんの思考と行動に驚き、不思議な魅力を感じながら取材を続けたという。

松原さんの強烈な異端ぶりを知るには、ご本人が語るよりも、第

三者の聞き書きの手法が効果を上げていようだ。

文明生活に目もくれず、自由闊達に荒々しい自然の中で生活してきた松原さんの人生に、読者は圧倒されるに違いない。

(松澤節夫)

■8月の理事会は夏休みのため休会でした



ルーム日誌 8月

1日 YOUTH CLUB 山岳地理クラブ
2日 YOUTH CLUB 科学委員会 三水会
3日 総務委員会
5日 総務委員会
6日 常務理事会 スケッチクラブ
7日 山行委員会 YOUTH CLUB

9日 図書委員会
13日 山岳研究所運営委員会 スケッチクラブ
14日 休山会
15日 二火会 マウンテンカルチャークラブ
19日 総務委員会
20日 スキークラブ 里山歴史研究会 沢登り同好会Ⅱ
21日 記念事業委員会 つくも会 平日クラブ
22日 公益法人運営委員会 01会 山遊会
23日 会報編集委員会 総務委員

会

26日 青年部 緑爽会

27日 デジタルメディア委員会

YOUTH CLUB

28日 家族登山普及委員会 YOUTH CLUB 麗山

会

29日 自然保護委員会 記念事業

委員会 フォトクラブ

31日 土曜会

8月来室者 365名

『山岳』の「永年会員」欄の掲載ミスについて

本年8月下旬にお届けした『山岳』2019年版(第114号)の121頁「永年会員」欄に誤りがありました。当該頁には平成30年度の永年会員のお名前が載るべきところ、手違いで31年度の方々が掲載されてしまいました。深くお詫び申し上げます。つきましては、30年度永年会員の皆様のお名前は、来年発行の同誌(平成31年(令和元年)度・第115号)に31年度永年会員の方々とともに掲載させていただきます。

『山岳』編集委員会

会員異動

物故

相模八郎(4474) 19・8・22

高石清和(4738) 19・7・31

和久井正明(7553) 19・8・12

竹重一朗(13555) 19・8・5

退会

小川益男(8743)

新道静香(12002)

永島賢司(13369) 越後

平田博夫(15725) 広島

吉原清佳(15767)

田中啓太(16284) 岐阜

I N F O R M

インフォメーション

A T I N

◆自然保護講演会 「高尾山にも迫りつつあるシカ―シカの食害について―」

講師 麻布大学ののちの博物館上

席学芸員 高槻成紀氏

日時 10月29日(火)18時30分

場所 立川市女性総合センター5

F第3学習室

定員 60名

参加費 400円

問合せ・申込み先 10月20日まで

に、東京多摩支部 自然保

護委員会・河野悠二まで

TEL 04215444738

kyuuji@mwd.biglobe.ne.jp

◆講演会のお知らせ

演題 日本山岳会草創期の2人：

：小島烏水と岡野金次郎

について(2人のお孫さん

を交えて)

講師 神奈川支部・砂田定夫氏

四国支部・小島誠氏 緑爽

会・渡邊貞信氏

日時 10月28日(月)18時

場所 日本山岳会104号室

定員 先着順35名

問合せ 富澤克禮

TEL・FAX 04213244050

tomizawa-katsunori@nifty.com

◆編集後記◆

●1枚の写真に惹かれて山を選ぶことがありませんか。その写真には、緑の草原に白い十字架が立ち、背後にはたおやかな山の頂が……。そして、撮影者の梅沢俊さんの「筆者は山の上の人工物はあまり好かない。《略》しかし大千軒岳には多くの血が流されてきた。あまりにも不条理で悲しい血が。だから大きな十字架は、この山に限り似合うような気がしてくる。」とのコメントが添えられていました。

●夏山第2弾は津軽海峡を渡って、道南のこの大千軒岳に行ってきた。標高の割にはハードな道程を経て中千軒岳の肩に着くと、百花繚乱のお花畑の中で、少し傾きかけた白い十字架が、蝦夷キリシタンたちの悲劇を静かに語り掛けてくれるようでした。(節田重彰)

日本山岳会会報 山 892号

2019年(令和元年)9月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 古野 淳
編集人 節田重彰
Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社